札幌学院大学図書館報

書林

第 88 号

2015 年 10 月 5 日　発行

巻頭言---------- 1
私の薦めるこの１冊----------2～4
from Library ----------5
自著紹介----------6～9
Welcome to SGU Library----------10～11
編集後記----------12

１０分間読書から始めよう

図書館長　皆川　雅章

読書習慣を持つきっかけは、人それぞれだと思います。私の場合、１０代後半に書店の店頭を何気なくながめていて、目にとまった北杜夫（きたもりお）さんの作品を読み始めたことでした。特に作者の旧制高等学校時代の生活を話題にした「どくとるマンボウ青春記」は今でも強く印象に残っており、登場人物達を通じて描かれる「バンカラ」で自由奔放な行動に惹かれて一気に読み終えた記憶があります。この作者の軽妙でユーモアにあふれた文体も大きな魅力でした。

これ以降は、乱読気味でしたが、海外の旅行・滞在記録、海外文化を紹介する本を読むのが好きでした。そのような本を読むことによって、自分が行ったことのない場所、自分が出会ったことのない人々、自分が接したことのない文化等を頭の中に描いて楽しむことができました。その当時、海外旅行が一般的ではなかったので、読書によって疑似体験をしていたことになります。それから、思想に関する本を読むことによって、長い歴史の中で、これまで人々が蓄積してきた、物の見方、考え方を知ることができたように思います。あるときは共感を抱き、あるときは疑問を持ちつつ読むことによって、擬似的な対話を通じた思考の訓練を行っていたと言えるかもしれません。

このような読書おいて、共通して言える事は、生活であれ、文化であれ、思想であれ、自分とは異質なものに対する理解を深めることができるということです。もちろん、実際に直接体験し、見聞きするということの重要性を否定するものではありません。しかしそれには限界があります。社会におけるトラブルの原因として、互いに相手についての知識を持ち合わせていないことが原因である場合があります。いきなりリアルの世界で衝突する前に、読書によってバーチャルの世界でシミュレーションをしておきましょう。読書は自分の経験や思考の幅を広げるとともに、そのような社会的な行動を考える上でも役立つのではないかと思います。

最後に、図書館長として学生諸君に一言。１日に１０分間の読書を１年間続けるとどうなるでしょうか？合計時間は３６５０分で、これは２日と１２時間５０分になります。連続して休み無く２日半も読み続けることは現実的には無理ですが、１０分であれば、通学の途中でも、授業の合間でも割くことはできます。みなさんが社会に出ると、この毎日の積み重ねが出来るかどうかで将来が大きく変わってきます。本を新聞に置き換えてもよいでしょう。最初は手軽な新書版で良いので、まずは手に取って読んでみましょう。本のタイトルを絞り込めないときには、図書館職員の方に関心のある分野を伝えて、尋ねてみましょう。あなたのための１冊が見つかると思います。

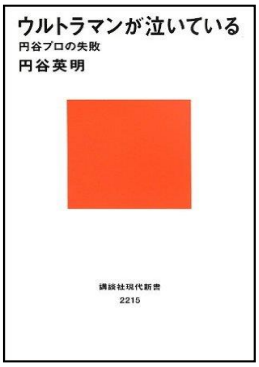
※ 皆川館長は、今年度〔2015（平成 27）年 4 月〕より、新図書館長として就任されています。
ご挨拶を兼ねて、巻頭言にお寄せいただきました。

■ 私の薦めるこの１冊 ■

『ウルトラマンが泣いている：円谷プロの失敗』　＜講談社現代新書＞

円谷　英明［著］

〔 講談社　2013 年 〕



坂口　勝幸（ 経営学部 准教授 ）

昭和４０年代。当時の少年たちのヒーローとして、ウルトラマンが君臨していた。ＣＧ全盛期の現代から見ると、稚拙感この上ないが、地球を守る使命を全面に怪獣（侵略者）とのバトルをど迫力で展開し、最期は必殺技で仕留める。国民的「勧善懲悪ドラマ」であった水戸黄門にも通じるようにも思える。

制作者である「円谷プロダクション」は、特撮の神と言われた円谷英二が率いる職人集団だった。緻密な技術を駆使して、「精巧さ」「ものの質感」に徹底的にこだわり、火薬や炎を用いて「壊れる美学」をも追求するこだわり集団でもあった。そして、「子どもに受ける」ことの先に「大人も納得するテーマ性」を両立させたことが何よりも素晴らしい。加えて、爆発的ヒットを生かし、キャラクター商品の開発、販売を手がけ、著作権ビジネスの先駆けを担ったことは、大きな功績と言える。

しかし、職人気質は時として暴走する。ビジネスには「採算」が大前提。それをも度外視してしまうことは、夢とロマンを追う姿としては共感できるかもしれないが、会社としていかがなものか。結局、そのことが災いとなり、名前は円谷プロダクションながら、実質的に創業一族は何ら経営に関わることの無い会社となってしまった。著者は、創業者の孫にあたる人物であり、自身も末期の同社の経営を担い、創業以来の伝統と国民的ヒーローを守ろうと懸命な努力をしている。本書の全体をとおして、現在の状況への無念が伝わる。同時期に誕生した「仮面ライダー」に対して、「仮面ライダー＝人件費中心の制作＝ヒットすれば確実に儲かる。ウルトラマン＝人よりも技術だから・・・」など、恨み言と誇りが混在する表現もたくさん登場する。

「夢とロマン」と「経営」の両立の難しさを知ることの出来る一冊だと思います。

【 図書館所蔵　第４閲覧室：文庫 778.06/TSU 】

『ふたりはともだち』

アーノルド・ローベル［作］　　三木　卓［訳］

〔 文化出版局　1972 年 〕

山本　　彩（ 人文学部 准教授 ）

欲しい情報が、すぐに、大量に手に入るこの時代。皆さんはゆっくり一頁一頁本を読む時間をお持ちですか？「本なんて面倒くさいよ」「でもたまには読んでもよいかな」という方へ、私のお薦めは絵本です。ほんの数分で日常とは異なる世界へ誘ってくれます。

この「ふたりはともだち」は５つの短編からなっており、その一つの「おてがみ」は私が小学生だったときに教科書に載っていたものです。挿絵の風合いと物語の余韻を、私は何故かずっとかすかに覚えていて、大人になってから無性にまた出会いたくなり絵本屋で探し出しました。ともだちの「がまくん」と「かえるくん」が織り成す、なんてことのない毎日。とりわけ大きな事件も、感動的な出来事も、説教がましいこともないけれど、二人のやりとりから、多くのことを感じます。

何度読んでも飽きのこない、また、その時々で感じることが異なる、お薦めの一冊です。

【 図書館所蔵　第１閲覧室：絵本コーナー 933/LOB 】

■ 私の薦めるこの１冊 ■

『武道館』　朝井リョウ 著

〔 文藝春秋　2015 年 〕

須藤　　健（ 経済学部 経済学科 ３年 ）

日頃から「アイドル」に興味を持っているというわけではないのですが、偶然この本が新聞や雑誌で紹介されていたのを見て、ちょっと読んでみたいと思ったことがきっかけでした。

一見華やかなアイドルという職業にも、私達の知らない裏の世界があることを感じさせます。私が知らないだけかもしれませんが、女性アイドルを主人公にしたもので、現実に起った事件を匂わすような作品は、これまで無かったと思います。そして最後は、予想をしていなかった結末になっています。

感銘を受けた点では、主人公と幼なじみとの会話の中にある「自分が選び取ったものだから、ちゃんと大好きなんだよね」という主人公の言葉に、人が大切にすべきものについて、私自身、考えさせられました。主人公の心の変化による言葉・行動について意識して読むと面白いと思います。

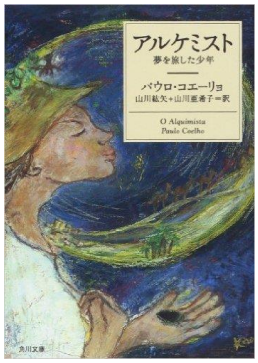
アイドルに関して、あまり詳しくない私が読んでも、登場人物に共感できる部分があったので、是非、読んでみてください。

【 図書館所蔵　１層書架：和書 913.6/ASA 】

『アルケミスト：夢を旅した少年』＜角川文庫＞

パウロ・コエーリョ［著］；山川紘矢、山川亜希子［訳］

〔 角川書店　1997 年 〕



大田蒼一郎（ 経営学部 経営学科 ２年 ）

この本との出会いは、バイト先の店長が読んでいて薦められた・・・、というのがきっかけでした。日頃から本を読むのが好きな私は、すぐにこの本の魅力に引き付けられました。

物語は、宝物が隠されているという夢を信じて、羊飼いの少年サンチャゴが、アンダルシアの平原からエジプトのピラミッドに向けて旅に出ます。そして少年は、錬金術師の導きと旅のさまざまな出会いと別れの中で、人生の知恵を学んで行く・・・、といったストーリーです。

読んでいく中で、人間の存在意義を教えてくれる場面もあり、その中で「何かを強く望めば周り（宇宙の全て）が協力して実現するように助けてくれる。」「人はみな錬金術師になれる。ただなることをあきらめているだけなのだ。」というフレーズに感銘を受けました。

サンチャゴの羊の動向に対しての台詞や、「大いなる魂」という言葉はいったい何なのか・・・、といったことを意識してみると、より一層おもしろく読むことができると思います。

欧米をはじめ、世界中でベストセラーとなった夢と勇気の物語です。是非、読んでみてください。

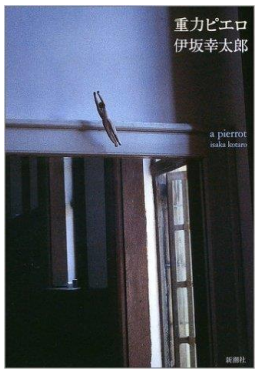
【 図書館所蔵　２層書架：文庫 969.3/COE 】

■ 私の薦めるこの１冊 ■

『重力ピエロ』　伊坂幸太郎[著]

〔 新潮社　2003 年 〕

鎌田　流那（ 法学部 法律学科　１年 ）



私は高校時代、生物が好きだけど苦手だった。少しでもその苦手意識をなくしたい一心で、生物のあのコドンを使ったミステリー物だと聞き、この本を手に取った。これを機に生物のテストで良い点を取れれば良いなと祈りながら。しかし、私のテストの点アップというだけの目的は直ぐに消えた。冒頭の一説から純粋にこの物語に引き込まれたからだ。

他には無いと思われるだろう、本格的なコドンミステリーと DNA の二重らせん構造のように絡む「家族」と「生」と「生き方」の謎。あなたは、もしも自分の愛した人との間にレイプ犯によって生み出された命があったらどうしますか？私はどうするだろうか。すぐさまに忘れてしまいたい過去としてその新しい命と共に捨ててしまうかもしれない。けれど、それが本当に正しいのだろうか。辛い過去のある家族。その兄弟が大人になった時、今まで見たことのない新しいミステリーと感動が二重らせんのように絡んで落っこちてきます。

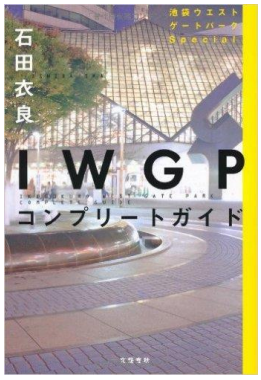
【 図書館所蔵　１層書架：和書 913.6/ISA 】

『IWGP コンプリートガイド：池袋ウエストゲートパーク Special』

石田　衣良[著]

〔 文藝春秋　2010 年 〕

緒形　なほ（ 教務課 ）



私は、池袋ウエストゲートパークシリーズ（IWGP）をお勧めします。私とこの本との出会いは、15 年前の深夜ドラマがきっかけで、小説にも興味を持ち、夢中になりました。ドラマの主人公マコト、キングらＧボーイズが、かっこよく、魅力的で、衝撃を受けたことを今でも覚えています。

IWGP は、マコトの視点から始まる物語で、文章がため口なので、好みは分かれるかもしれません。しかし、そこは気にせず、読み進めて欲しいと思います。マコトの日常で起きる出来事は、リアルで、目を背けたくなるような残酷な状況もありますが、解決策が見事なので、読後感がとても良いです。特に 10 作目の「プライド」は、辛い内容の中にも救いがあり、登場人物リンの強さと、優しさに心奪われ、何度読んでも感動します。

現在本学の図書館には、シリーズが全作揃っていますので、感性が豊かな時期の学生の皆さんに、どの作品からでも良いので、ぜひ読んでみてほしいと思います。

【 図書館所蔵　１層書架：和書 913.6/ISH/[別] 】

＜池袋ウエストゲートパークシリーズ【 １層書架：和書 913.6/ISH 】＞

[1] 池袋ウエストゲートパーク
[2] 少年計数機〔池袋ウエストゲートパーク2〕
[3] 骨音〔池袋ウエストゲートパーク3〕
[4] 電子の星〔池袋ウエストゲートパーク4〕
[5] 反自殺クラブ〔池袋ウエストゲートパーク5〕
[6] 灰色のピーターパン〔池袋ウエストゲートパーク6〕
[7] Gボーイズ冬戦争〔池袋ウエストゲートパーク7〕
[8] 非正規レジスタンス〔池袋ウエストゲートパーク8〕
[9] ドラゴン・ティアーズ:龍涙〔池袋ウエストゲートパーク9〕
[10] PRIDE(プライド)〔池袋ウエストゲートパーク 10〕
[11] 憎悪のパレード〔池袋ウエストゲートパーク 11〕
[12] キング誕生〔池袋ウエストゲートパーク青春篇〕

読書する人

京谷　正博（図書館）

８月の末に明治学院大学横浜キャンパスで開催された第 76 回私立大学図書館協会総会・研究大会に参加する機会を得た。これは、全国の私立大学図書館関係者が集い、私立大学図書館の現状と課題を様々な角度から検討すると同時に情報交換の場でもある。

そのメイン企画に芥川賞作家の小野正嗣氏による講演があった。小野氏は作家であると同時に、立教大学で比較文学を教える准教授でもある。講演テーマは「本を読むこと、本に学ぶこと」というものであった。小野氏自身は学生時代から作家・比較文学研究者としての現在に至るまで図書館をほとんど利用してこなかったが、芥川賞を受賞してから各地の図書館主催の講演会に呼ばれるようになったそうである。そんな中、ある図書館で司書（全員女性）の方に何故、図書館の司書の仕事を選んだのかと尋ねたら、「本を読むことが好きだから」、「本というオブジェそのものが好きだから」、「図書館という空間が好きだから」という回答の他に、「利用者が本を読んでいる姿を見る事が好きだから」というちょっと想定外の回答があったという。私も長らく図書館で仕事をしているが、学生さんが読書している姿、その身体的行為そのものに興味を持ったことはなかったので、その女性司書の言葉に「はっと」させられた。小野氏はこの女性司書の言葉から、このような結論を導いている。「本を読むという行為は、日常の社会的空間における行為とは異なるものである。その時、人は本の創造的世界の中にいる、本の世界を追体験することにより現実との関係性をあらためて構築することができる。本を読んでいる時間は特別な時間であり、創造力の純度が高い。シグムンド・フロイトは、文学は遊びであると言い、人は、遊びの世界（空想の世界）から現実の世界へという代替形成を行い人間らしく生きることができる。読書は人をより人らしくするものである。」

「人をより人らしくする」という行為にこの女性司書は美しさを感じたのかもしれない。今、あらためて本学図書館で読書する学生さんを見てみると、何か未知なるものを求めて真剣に本と対峙している姿に美しさを感じるのは気のせいではないと思える。

読むことによりその作品世界に励まされ支えられ、自分の記憶の総体として自分の物語としてよみがえる。ボルヘスやバルトがいうとおり読者はテキストを読みながら書き直している。

作品から聞こえる声は語り手（作家）の声であり、読者は、それが創造的な自己の声として聞いている。その自己は社会的な自己とは全く別の自己であり、新たな自分の在り方を創造することができる。人は言葉で思考している、社会生活は言葉によるコミュニケーションで成立している。読むことは書くことでもあり、人が生きる上でもっとも重要な行為である。図書館は人がより良く生きるために必要な「場」であるということを小野氏の講演を聴いて再認識させられた。

佐々木　洋（名誉教授）

『ウォルマートはなぜ、世界最強企業になれたのか：グローバル企業の前衛』

ネルソン・リクテンスタイン　著
佐々木　洋　訳
〔 金曜日　2014 年 〕

「ピッ」と唄うウォルマート商法

― 拙訳『ウォルマートはなぜ、世界最強企業になれたのか』によせて ―

「マクドナルド化」と「ウォルマート化」

イオンでも生協でもコンビニでも、レジでスキャナーが「ピッ」と唄う。

「ピッ」と唄うと、いつ、どこで、何のどの品が、いくつ売れたか、ディーラーもメーカーもリアルタイムで掌握でき、在庫補充や、売れ筋の開発にも、増産にも役だつ。

この point of sale；POS＝販売時点情報管理の基礎となる、バーコード革命を先駆け商法の一つとして、アメリカ深南部アーカンソー州北西隅の片田舎に誕生した安売りチェーンが、やがて世界断トツのマンモス・スーパーにのしあがったのがウォルマート社である。

日本では落ち目だが、北京でもモスクワでもマクドナルドは人気がある。ファストフードが普及する今の世相に、「マクドナルド化」という切り口で迫ろうとする論客がいた反面、レジが「ピッ」と唄うリズムと関係なしには、ひとりも暮らしていけない現代を、「ウォルマート化」した社会だ、とは誰も言わない。あまりにも日常化していて、あまりにも当たり前になっているこのリズムの非凡さに、誰もがほとんど気を留めないからであろう。

日本の西友は米ウォルマート社の百パーセント子会社である。今の西友はパッとしない。西友のシェアも高くないため、日本人消費者は、ウォルマートと言ってもピンとこない。だが、あらゆるスーパー、あらゆるコンビニが、実はウォルマート商法に依拠している。

そして、ピッという唄は聞こえない、今流行の通販ショッピングも・・・。

ことの重みと奥ふかさを知らされたのが、リーマンショック翌年の 2009 年だった。

本学経済学部『外国書講読』履修者と米国視察旅行

筆者は現職最後の 2010 年度の担当科目に『外国書講読』を加えてもらった。その前年からアマゾンその他のネット予約案内に目を凝らし、The Retail Revolution＝小売革命の刊行予告を見つけた。そして本書が、優れた学術専門書であるのはもちろん、大学院生も含めた学生向けテキストにも使えることを心待ちにしていた。まさに図星の書物だった。

なぜなら、The Retail Revolution が、ウォルマート社に代表される米欧の郊外型巨大小売店舗（巨大スーパーのこと）チェーンが、安売り商法の圧倒的販売力を武器として、名だたるメーカーの風上にたち、さらには、世界の工場＝中国の巨大な生産力を、自社ブランドの消費財を無尽蔵に提供する下請け工場群として統合しつつあるという、現在進行形のグローバリゼーションのダイナミズムを、類書にない鮮やかさで活写しているからだ。

ウォルマートが安い理由は三つある。まず、従業員の 7 割をしめるパートさんが、終業後のアルバイトなしに家族を養えないほどペイが安い。第二は、販売品のゆうに過半を生産する中国南部の農民工（内陸からの出稼ぎ農民）の低賃金だ（昨今はヴェトナム産やバングラデシュ産もある）。第三が、IC タグのバーコード革命やコンテナ革命を真っ先に採用し、衛星通信を駆使するジャストインタイムの海陸一貫ロジスティックスであり、その物流規模の巨大さと高速性ゆえに、中国南部→米国内陸部の輸送コストを全く苦にしない。

筆者は『外国書講読』履修者有志と一緒に、ロサンゼルス在住のわがゼミ卒業生（中国人留学生夫妻）の厚意で、中国出港の大型コンテナ船が荷役するロサンゼルス＝ロングビーチ複合港や、ウォルマート店舗とそのライバル店舗などを視察する機会にも恵まれた。

流通システムの専門書、ビジネス書、歴史書、グローバル経済書の傑作

本書は、ウォルマート社の米国市場席巻と、同社主導による米中経済の相互依存、世界最大企業としてのウォルマートの海外攻勢（西友を含む）を、創業者サム・ウォルトンと歴代経営トップの経営戦略の継承・変遷にそくして述べている。しかし、本書は、ただ特定の一企業の成立史と海外進出をとりあげたものではない。かつてペンシルヴァニア鉄道やＵＳスティール、あるいはフォード社やＧＭ社を論ずることが、米国ないしその時代の世界を代表する企業システムについて議論したのとまったく同じ意義をもっている。

サムは、気さくで、そのうえ、なかなかの、カリスマ的人物であったが、最大の特技は、平素からライバルの優れた手法を貪欲に学ぶ才覚だった。興味深いことに、わが国の市場経済変貌のうえで一世を風靡したダイエーの故・中内功のもっとも学んだ同時代人がサム・ウォルトンだった。イオンの岡田卓也名誉会長もウォルトンは気になる存在だった。

逆に、バーコード革命やロジスティックス展開、中国南部の下請け工場地帯化などでは、米国内外のライバル各社が、事実上こぞってウォルマート商法を研究・模倣してきた。

本書『ウォルマートはなぜ、世界最強企業になれたのか』の原題 The Retail Revolution＝小売革命は、21世紀転換期に経済のグローバル化を媒介したのが、ウォルマートを前衛とする小売り革命（バーコード革命、ロジスティックス革命、中国南部の下請け工業基地化など）であったとの、ネルソン・リクテンスタインの世界観・歴史観を示唆している。

本書はそういう意味で、個別企業をこえた、業界全体、さらには特定の業界を越えた、「時代の書」という性格をもっていることを確認しながら訳業をすすめてきた。

本書は、物流業の専門書、ビジネス書、歴史書、グローバル経済書の傑作としてなど、いろいろの読み方が出来るだろう。経済・経営の学生諸君には、グローバル経済の浮沈と帰趨を、いまなお大きく左右する米・中の相互依存関係の実相と、それを媒介するマンモス・スーパーの活躍ぶりを実証的に説く、現代世界経済の歴史書として読んでほしい。

翻訳で大切なこと　原著者との交流

本書は筆者の３度目の英文原著からの邦訳書である。自分の語学力の限界をさらすようだが、原著者が、本当に何を言いたいのか、どうも分かりかねるパラグラフや用語法に出くわす場合があり、困ってしまう。原著者の単純な誤植に気づくこともある。

そういう場合、筆者は、原著者に照会の手紙を書き（最近はＥメール）、教えを乞うてきた。今回も、より正確を期したいと、５箇所ほど照会してみた。著者ネルソン・リクテンスタイン（カルフォルニア州立大学サンタバーバラ校経済史講座教授）は、即刻、回答をよせ、該当箇所について筆者個人の改善試案を求めてきた。教授と相談の結果、日本語版では、表現をより厳密に是正した箇所がある（本文中に注記してある）。

翻訳書を読んでいて、どうも分かりづらいとか、どうも筋が通らないと感ずる場合が往々にある。私の経験則では、適切といえない訳文に原因がある場合も少なくない。

そうした意見交換をへて、昨年秋、邦訳書の刊行を機に、ロサンゼルス近郊のサンタバーバラで、原著者と会食することになっていた。ところが、先のゼミ卒業生夫妻と再会する段取りも決まり、フライトの予約も済んで旅立つばかりのタイミングに、ここ数年の過労からか、突然発症し、生まれてはじめて、短期ながら入院する憂き目にあった。

脳神経科担当医から「米国行きは厳禁」といわれ、旅は１年お預けとなった。だが、自分がウォルマートと今ひとつ浅からぬ「縁」で結ばれる体験もした。最初の外泊が許され、自宅でたまったメールをチェックしようとＰＣに向った矢先、もののはずみで転倒、頭部をまもろうと、腕に傷を負った。近くの救急指定病院に行き、順番を待っていると看護士さんが、当院では診察できないと告げた。筆者の左手首に白黒バーコードのタグが巻いてあると分かったからだ。受付に戻るとスキャナーが「ピッ」と反応、救急担当医が、患者は 1.5ｋｍほど北の脳外科総合病院に入院の身と確認、急患をすかさず入院先の整形外科に送り届ける手はずが整った。サンタバーバラでの会話が弾むのは間違いなかろう。

【 図書館所蔵　１層書架：和書 673.8/LIC 】

自 著 紹 介　　二通　　諭（人文学部教授）

『障害児の教育権保障と教育実践の課題
：養護学校義務制実施に向けた取り組みに学びながら』

二通　　諭、藤本　文朗　編

〔 群青社　2014 年 〕

養護学校義務制実施、すなわち完全就学が制度的に完成したのは 1979 年のことです。これは、教育権の保障を謳う憲法制定から 32 年後のことでした。翻って、それまでは障害者を教育から排除する歴史だったのですが、その一方、本人・家族にとっては、涙と悲嘆に暮れながらも、あつい壁を破る闘いの歴史だったのです。

たとえば、学校に入学させてもらえなかった脳性マヒ者・木村浩子は、自身の思いを以下のように詠んでいます。(p.187)

わが思ひ　伝えむ願ひ　左足に　鉛筆はさみ　文字書き習ふ
不就学を　嘆かず足に　辞書めくり　漢字暗記す　雨のひと日を

後に最後の都立大学総長を務めることになる茂木俊彦（桜美林大学教授）も、1970 年から 1973 にかけて「文京区心身障害児実態調査委員会」を立ち上げ、毎晩のように最終電車で帰宅する生活だったと振り返っていますが、以下のエピソードを鮮やかに思い起こすことができると述べています。(p.206)

区との対話集会で、わが子と教育のことを語ろうとして立ち上がりながら、涙ばかり出てほとんど話せなかったあるお母さんが、事務局の反省会で、「先生、今日は泣いてしまって何も訴えられなくてすみませんでした。でも、この次は泣かずにしっかりと話せると思います。がんばります」とさわやかな表情で発言されたことです。この時、「この運動は、かならず成功する」という確信を私はつかむことができたのでした。

本書は養護学校義務制前史とその後を多角的に論じるところに真骨頂があります。すなわち日本の障害児教育の過去だけではなく、眼前の事象も捕捉しています。

たとえば、特別支援学校（養護学校）の過密・過大の問題です。2013 年度の特別支援学校幼児児童生徒数は 132,570 人で 2003 年度の 1.4 倍ですが、学校数は 995 校から 1,080 校、1.1 倍弱しか増えていないのです。その結果、特別室を教室に転用、カーテンによる教室の間仕切り、廊下での学習等々の事態をスケッチしています。(p.21-22)

操作主義的教育観跋扈（ばっこ）の問題も取り上げています。客観的に測定できないものを教育目標・教育評価の対象から排除する昨今の傾向に警鐘を鳴らしています。(p.10-15)

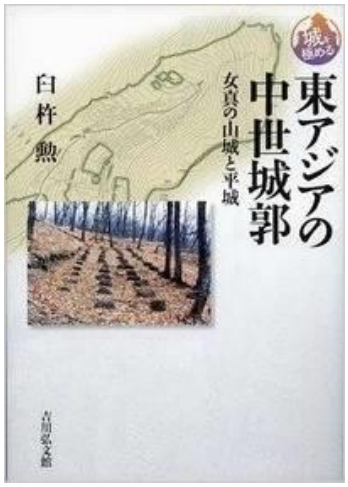
総勢 18 名からなる執筆陣。紙幅の都合でそのテーマすらここでは紹介できませんが、筆者の恩師である藤井力夫による『解題試論，エドゥアール・セガン『知的障がい者教育宣言』(1839) 青年セガンは J・M・G・イタールから何を学び，どのように発展させようとしたのか』は本書の価値を一層高めています。

筆者は、1974 年に新卒教員として情緒障害学級に着任。養護学校義務制前史の体験者として「養護学校義務化前史において、北海道の名もなき実践者から芸能人や作家、さらに視野を広げて、文部省の担当者らどのような役割を担ったのかについて、その一端を解き明かす」ことを目的に、『養護学校義務化前史を周縁部の動きから捕捉する試み』を執筆しました。伴淳三郎や森繁久弥ら芸能人による『あゆみの箱』の運動や水上勉による『拝啓池田総理大臣殿』などに光を当ててみました。読者諸兄諸姉におかれましては、御批判のほどよろしくお願いします。

【 図書館所蔵　本学教員著作コーナー（ラウンジ）：和書 378.021/NIT
１層書架：和書 378.021/NIT 】

臼杵　　勲（人文学部教授）

『東アジアの中世城郭：女真の山城と平城』



臼杵　　勲　著

〔 吉川弘文館　2015 年 〕

本書は、2015 年から発刊が開始された「城を極める」シリーズの 1 冊である。このシリーズは、考古学・歴史地理学・縄張り研究などの多角的な視点から日本の中近世の城郭を紹介することを意図している。最近、2006 年に選定された「日本百名城」や、「日本のマチュピチュ」とよばれる兵庫県竹田城などが注目を集め、城歩きを楽しむ人々が増えている。本シリーズは、より城歩きの内容を深めることのできる入門書としての意味合いを持っている。本書はその中で、日本列島外からの視点で中世城郭を考えるものとして位置づけられている。もっとも、扱う対象からすれば、通常の日本の城郭関連の書籍とはかなり異質な内容である。

このシリーズの企画をされた城郭考古学研究の第一人者である千田嘉博先生（奈良大学学長）から、日本海対岸地域（ロシア極東・中国東北部）の城郭について紹介してほしいとのご依頼があったのだが、正直なところ、日本の城郭ファンには唐突すぎないかと、最初は尻込みしていた。しかし、あまり知られていない地域の内容を広く知ってもらうことにも意味があるのではと思い直してお引き受けすることとした。千田先生とは、中世考古学の大型プロジェクト、その後モンゴルの城郭都市の研究を共同で進めた縁があり、私の研究についてもよくご存じであったことから、今回の企画に加えられたのであろう。

本書は、2004 年から 2013 年年にかけて科学研究費補助金の助成を受けて実施した研究の成果が基になっている。先ほど述べた中世考古学プロジェクトの研究も含んでおり、実はその際に初めて手掛けることになった分野である。もし、プロジェクトがなければ、おそらくこの分野とめぐり合うことはなかっただろう。そのため、調査法・ノウハウや基礎知識の取得、さらに現地調査には大変苦労することとなった。考古学と一口にいっても、対象となる遺跡、地域、時代が違えば、研究のアプローチもまったく異なるので、不惑（40 歳）を越えて一から始めることとなった研究で、大いに勉強させられることとなった。山城歩きは 20 代の学生時以来という状態で体力的な不安も抱え、先の見えない研究であったが、衛星画像・GIS など最新の手法を活用しながら調査研究を進め、その結果を形にするのは楽しい経験であった。合計すると 7～8 年ロシア沿海地方・中国東北部の各地で城郭を調査し、それなりに気づいたり考えたりする点も生じた。今後は、これらをさらに考察し論文などの形にまとめていきたい。本書の内容は、まだその途中経過であるが、日本海対岸地域の中世女真族の城郭の概要はまとめられていると考えている。本書を通じて、女真の城郭遺跡やロシア極東考古学に関心を持っていただければ幸いである。

なお、出版元である吉川弘文館は歴史書専門の出版社として著名である。学生のころ日本史の教授が、ここから単著が出せれば歴史学者として一人前だとよく言われていた。ようやく一人前半くらいにはなれたかなと、ちょっとうれしく感じてもいる。

【 図書館所蔵　本学教員著作コーナー（ラウンジ）：和書 222.05/USU
1 層書架：和書 222.05/USU 】

さいとう　ゆうだい
齊藤　雄大 さん（人文学部臨床心理学科３年）

「自分ができることを見つける」

入学時より、図書館に興味を持っていただき、通常における利用は勿論のこと、本学図書館でのアルバイトを積極的に希望され、１年生の時から定期的に資料移動や配架の仕事を行っていただいています。
今年の夏休みは、図書館でのアルバイトを行いながら、もう一つ別のアルバイトをこなし、加えて将来に向けての資格試験の勉強も怠らない充実した日々を送られていたようです。
そんな齊藤さんに、本学の人文学部を希望した理由や、将来の目標などを、お伺いしました。

― ご出身とご卒業された高校を教えてください
もし高校時代にクラブなどで活動をされていましたら、あわせて教えてください。

出身は青森県弘前市で、弘前南高校を卒業。高校時代は空手部に所属していました。

― 本学の人文学部臨床心理学科を選んだ理由と、将来に向けての目標をお聞かせください。

昔、心理系のあるドラマをみて、人の心に興味を持ったのがきっかけです。
今は将来に向けて精神保健福祉士の資格を取るための勉強をしています。この資格を取ってMSW（医療ソーシャルワーカー）になるのが今の私の目標です。

― 現在３年生で、学部の専門科目を中心に勉強されていると思いますが、大学での授業はいかがですか。勉強されていて、難しいと感じているところはありますか。

精神保健福祉士の勉強をしていて一番難しいと思ったことは当事者の方との接し方です。ある程度のマニュアルは教わりますが、一人一人の性格は違うので、その都度対応を変えなければなりません。そこのさじ加減はこれから経験していって身につけていきたいと思います。

― 入学時から、積極的に図書館でのアルバイトを希望されていたことが印象的なのですが、これまで仕事（資料移動・配架が中心）をされていて、印象に残っていること（やりがいを感じたことや苦労話など）を、是非、教えてください。

一番つらかったのは雑誌の移動です。厚い本だと置いても立ってくれるから運ぶだけでいいのですが、雑誌のように薄いとそれを抑えながら運ばないといけないので地味にイライラしました（笑）。

あと、番号を見て順番に移動する時に、小数点第三位まであるのを見て「ここまで分ける必要があるのか！」と突っ込みながら仕事していました（笑）。体力的にもつらかったですが、空いている所に移動したときに、番号と本がちょうどはまった時は、快感でした。

― ボランティア活動など、卒業を目的とした勉強以外、大学時代において他にやってみたいと思っていることはありますか。

バイトや遊びなど若い時に経験できるものはたくさんやっておきたいです。社会人になるとほとんどできなさそうですし・・・。

― 本学図書館に関連する質問をさせていただきます。
― 主な図書館の利用目的は何ですか。どんなことに役立っていると感じていますか。

主に授業の予習・復習やテスト勉強に利用させてもらっています。
勉強や資料を探したりする時はとても役立っています。

― 齊藤さんにとって、図書館のお気に入りの場所 Best３を教えてください。

＜１位＞
第１閲覧室の窓際の席です。リラックスしながら勉強できるので気に入っています。
＜２位＞
第２閲覧室です。一人で勉強した方が個人的に集中できるので静かに一人で勉強したいときによく利用しています。
＜３位＞
第４閲覧室です。レポート課題など、パソコン使うときに利用しています。

― 最後に、本学図書館を利用している上での感想や要望、また、他の学生さんに図書館活用法のアドバイスがあれば、お願い致します。

私は、ほとんど勉強する時ぐらいしか図書館を利用しないので、図書館にある色々な本を手に取ってあまり読んだりはしていません。できれば私に活用法のアドバイスが欲しいです（笑）。
あえて言うとしたら、周りに勉強している人がたくさんいる所で勉強すると捗りますよ。「自分も頑張らないといけない！」という気持ちにしてくれるので（笑）。

― 突然のインタビューにもかかわらず、快くご対応いただき、ありがとうございました。
図書館でのアルバイト（資料移動・配架業務）、お疲れ様です。感謝しております。
これからも図書館を大いにご利用いただき、目標に向かって頑張ってください。

編集後記

今年の夏、皆さんにとって色々な思い出が刻まれたことでしょう。気候的には、意外にも８月下旬にはテンションダウンし、比較的過ごし易くなるのかなと思いきや、各地で強風や突然の雷雨に見舞われ、関東・東北大水害にみられたように、今年も、自然災害の発生が目立つ夏でもありました。毎年のことながら、自然の猛威には本当に驚かされるばかりです。その一方で、自然に助けられたり癒されたりする・・・、そんな恩恵を受けていることも忘れてはいけないでしょう。秋の季節もまたその一つ。食に、芸術に、スポーツに、そして読書に最適な秋を楽しみましょう。当『書林』掲載の「私の薦める１冊」を参考に、読書の秋を楽しんでいただければ幸いです。

図書館ではこの夏、書架照明器具の変更を行いました。具体的には、１層・２層・３層書架において、照度に加え節電効果等を考慮し、ＬＥＤ照明への変更、及び、部分的に人感センサーを導入しました。このセンサーは、人を感知して速やかに点灯し、人がいなくなったと判断したのち３分程度で消灯するものです。利用者への配慮を十分に考え改善を図っておりますが、利用上、支障がありましたら、遠慮なくカウンターまでお申し出ください。

さて、多くの方々のご協力により『書林』第 88 号を発行することができました。ご多忙にもかかわらず、快く執筆やインタビューをお引き受けいただきました学生の皆さん、教員ならびに職員の皆様に、心よりお礼申し上げます。

今回お届けする『書林』第 88 号の主な内容は、次のとおりです。ご感想・ご意見などがありましたら、図書館までお寄せください。

■巻頭言
今年４月に就任された図書館長の皆川先生から、読書の必要性と、無理なく読書が始められる方法について、学生の皆さんに向けてのメッセージです。

■私の薦めるこの１冊
本学の学生および教職員の方々に、とっておきの本のご推薦をお願い致しました。今回も心に響く作品ばかりです。興味のある著作については、是非、読んでみてください。

■from Library
研究大会での講演を聴いて、人がより良く生きるために図書館が必要な「場」であることを再認識した図書館職員のエピソードが書かれています。

■自著紹介
本学名誉教授による翻訳図書と人文学部教員２名が各々執筆された図書の紹介です。それぞれの分野において大変貴重な発刊図書です。是非、ご一読ください。

■Welcome to SGU Library
入学時から図書館でのアルバイトしてきた人文学部３年生へのインタビューです。将来の目標に向かって資格の勉強に取り組む姿勢や、図書館利用についての感想が述べられています。

〜〜〜

札幌学院大学図書館報「書林」第 88 号について

＊掲載記事の著作権は札幌学院大学図書館にあります。

＊記事・写真の無断転載は禁止します。

＊紹介図書の写真については、各出版社から掲載許諾を頂いております。
許諾を下さいました各出版社の皆様には心からお礼申し上げます。

〜〜〜